

# 東原遺跡D地点

—県営畠地帯総合土地改良事業東原地区  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1994

静岡県西部農林事務所  
静岡県浜北市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、平成6年度に実施した、静岡県浜北市新原に所在する東原遺跡D地点の発掘調査報告書である。
2. 調査は、県営畠地帯総合上地改良事業東原地区に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として静岡県西部農林事務所の委託を受け、浜北市教育委員会で調査を実施した。
3. 調査は、浜北市教育委員会生涯学習課職員久野正博が担当し、一部生涯学習課職員河野貢子の参加を得た。
4. 造物の整理は、久野正博、安間寿美代が行った。
5. 鉄製品の保存処理及び、実測については、鈴木敏則（浜松市博物館）の御指導をいただいた。  
また、保存処理についての玉稿をいただき、本書に付載として掲載した。
6. 本書は、調査にあたった久野が執筆・編集した。
7. 調査に係る資料は、浜北市教育委員会にて保管している。
8. 今回の発掘調査において、下記の方々より御協力をいただいた。（敬称略）  
栗野利明・小畠匡男・小畠充利・佐藤由紀男・東原津島神社・松野実

## 凡　　例

### 1. 遺跡名・遺構の略称

#### 遺跡名

- S H 芝本遺跡  
例 S H A ……芝本遺跡A地点  
H G 東原遺跡  
例 H G D ……東原遺跡D地点

#### 遺構名

- S B 竪穴住居  
S II 掘立柱建物  
S K 土坑  
S P ピット・小穴

### 2. 遺構の表記について

遺構図で、遺構掘り方の上下の稜線が入ったものは、遺構を完掘したものである。破線は、遺構の推定線である。

### 3. 遺構・遺物実測図の縮尺

遺構全体図は200分の1、遺構図は40分の1、遺物実測図は3分の1に統一した。

## 目 次

I 調査に至る経過.....	1
II 地理的・歴史的環境.....	2
1. 地理的環境.....	2
2. 歴史的環境.....	2
III 従来の調査.....	8
IV 調査の成果.....	10
1. 遺構.....	10
2. 遺物.....	14
V まとめ.....	18
付載「浜北市東原遺跡出土歴先の保存処理報告」.....	19

## 図版目次

第1図 位置図.....	3
第2図 遺跡位置図.....	5
第3図 東原遺跡D地点の調査（昭和40年～平成6年度分）.....	9
第4図 調査区域図.....	11
第5図 遺構全体図.....	12
第6図 遺構実測図.....	16
第7図 遺構・遺物実測図.....	17

## 挿図目次

1 東原遺跡D地点航空写真.....	21
2 a. SB01及びSK03 + b. SK01.....	22
3 a. SH01及びSH02 + b. SH01.....	23
4 a. SK01 + b. SK02.....	24
5 a. SP01及びSP02 + b. SB01出土鉄製歴先.....	25

# I 調査に至る経過

浜北市新原東原地区は、市のほぼ中央部に位置し古くから苗木の産地として知られ、昭和40年ころから植木の産地化が図られてきた。

この地区は、新規作物の導入や農業経営規模拡大が検討されながらも、雨が降れば湿害、雨がなければ干ばつ、道路も狭く機械化ができなかったため、昭和45年頃から何回か土地改良事業の要望がでたが、今一步で地元調査が整わず、実施に至らなかった。

昭和57年に地区的中央を国道152号線浜北バイパスが東西に一部開通したことや、運搬用機械の大型化や作業の効率化、排水路の整備などのために、昭和60年から土地改良事業で整備要望が高まり、制度検討した結果、区画整理事業、畠地かんがい事業、農道事業を県営畠地帯総合土地改良事業として平成元年度より実施するに至った。

この土地改良事業地区内には、周知の遺跡である東原遺跡の存在が從来より知られていた。昭和62年10月に静岡県西部農林事務所より浜北市教育委員会教育長宛に文化財の所在の有無についての問い合わせがあり、事業地区内には周知の埋蔵文化財が存在することを回答した。

これを受けて、昭和63年10月に、教育委員会、市土地改良課、西部農林事務所の三者で協議を行った。この時点では、事業が明確化しておらず、具体的な内容には至らなかった。

平成5年6月に、教育委員会、市土地改良課、東原地区土地改良区、静岡県西部農林事務所の四者で、埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。

今回の事業地区内にある東原遺跡のうち、A・B地点については、工事が先であるのと、現段階において設計がはっきりしていないことと、教育委員会が、大規模発掘調査事業を抱えており、東原遺跡A・B地点の発掘調査の計画は目途がたたず、むしろ、工事を早急に行う必要がある東原遺跡D・F地点について、確認調査を行うこととなった。

確認調査は、D地点を平成5年7月21、22日、11月18日、平成6年1月27日に実施、F地点は平成5年7月20日に実施した。

確認調査の結果、D地点の畠総東原地区54号農道予定地内で遺構プランが確認された。また、F地点からは明確な遺構が確認されなかった。

遺構が確認されたことから、再び四者で協議を行い、平成6年度中に教育委員会で発掘調査を実施、費用は静岡県西部農林事業所で負担することになった。

平成6年4月、浜北市と西部農林事務所で埋蔵文化財の取り扱いについての協定書を締結した。また、同年5月には、東原遺跡D地点の発掘調査の委託契約書を浜北市と西部農林事務所で締結した。

平成6年5月より、現地発掘調査を実施し、6月に完了、引き続き7月～9月まで整理作業を実施した。

## II 地理的・歴史的環境

### 1 地理的環境

長野県諏訪湖から流れ出る全長216kmの天竜川が、山地を離れる天竜市鹿島から下流の地域には、右岸の三方原・左岸の轟田原の両台地にはさまれるようにして、南北約26km、東西の最大幅約13kmの沖積平野が発達している。その南方は遠州灘に面しており、天竜川がそいでいる。

浜北市はこの沖積平野の北方を占め、天竜川の河口より約20kmの右岸域に位置する。浜北市の沖積平野には浜北段丘と称せられる河岸段丘が南北に形成され、この河岸段丘端上に自然堤防が発達し、その上を国道152号線（二俣街道）、遠州鉄道西鹿島線が走り、宅地、畠地として早くから利用されている。

この自然堤防上の南北2.5km、東西500mの範囲に縄文～古墳・奈良時代にいたる遺物が散布し、遺跡群が形成されている。本発掘地点はその遺跡群の最南端部の段丘べりにあたる地点で、現在も古墳～奈良時代にいたる遺物の散布が確認されるが、他の地点同様に微高地に立地し、遠州鉄道芝本駅に隣接するためか、畠地より宅地化され近年その景観は著しく変貌しつつある。

なお本地点の地番は浜北市新原50-10である。

### 2 歴史的環境

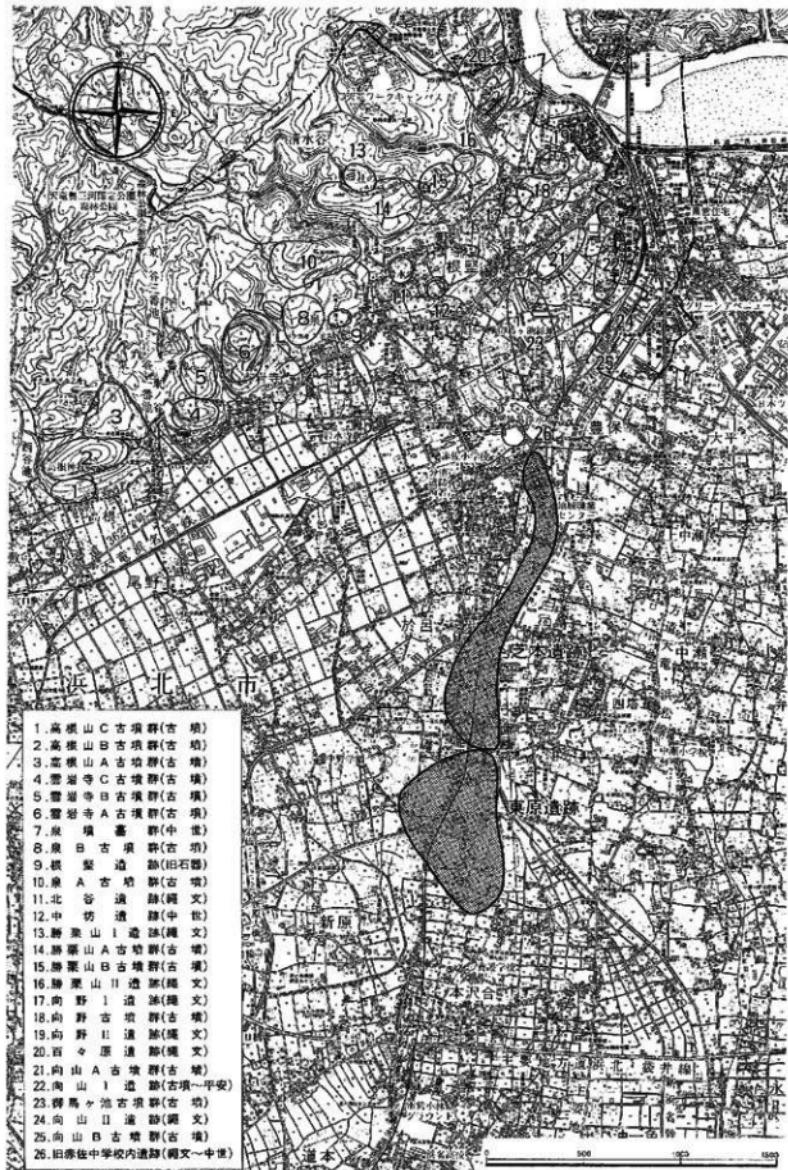
昭和38年に浜名高等学校史学部による芝本遺跡第1次発掘調査以来、今回の発掘調査にいたるまで、芝本・東原地区における発掘調査は31年間の長期にわたって行われてきた。

浜名高等学校史学部の発掘調査、静岡県教育委員会による遺跡分布調査、浜北市教育委員会の発掘調査などから、芝本・東原地区における遺跡のありかたが、浜北段丘と称せられる天竜川河岸段丘東端の自然堤防上に立地し、東西0.5km、南北2.5kmと南北に長い分布範囲をもつことが判明し、さらに芝本・東原地区では弥生時代後期を中心とし、縄文時代・古墳時代・奈良時代の長期にわたり生活が営まれたことも判明している。とはいっても、居住の時間差、立地条件等から遺物散布地を十数地点に分割できうるものと考えられるので、芝本・東原地区でのこれら十数地点の遺物散布地を浜北市芝本・東原遺跡群と総称し、芝本地区ではA～H地点、東原地区ではA～F地点に分けることとした。

#### 遺跡各説

##### 芝本遺跡 A地点 (S H A)

遠州鉄道西鹿島線（以下遠州鉄道とする）岩水寺駅より北東約100mに位置し、かつては芝本第1遺跡と称せられ、南北100m、東西80mの8,000m<sup>2</sup>の範囲に弥生時代中期の土器片、縄文時代と思われる黒曜石片が散布していたが、現在はほとんど宅地化され、遺物の散布は見られない。また、古墳が3～4基存在していたらしいが、すでに消滅しており、出土品も伝えられていない。



第1図 位置図

### **芝本遺跡 B地点 (S H B)**

芝本遺跡A地点より南へ150mに位置しており段丘崖端に立地する。南北50m、東西50mの2,500m<sup>2</sup>とごく狭い範囲に弥生時代中期の遺物が集中的に散布している。他に少量の縄文時代の石鏸、弥生時代後期の上器片が散布している。

本地点は從来芝本第I遺跡、岩水寺弥生遺跡と称せられている地点であり、昭和40年、浜名高等学校史学部が発掘調査を行い、弥生時代中期の徹田式に併行する時期と考えられる隅丸方形プランの住居跡が一軒発掘されている。(浜北市教育委員会1985・1991)

### **芝本遺跡 C地点 (S H C)**

芝本遺跡B地点と北部で接する段丘崖端に位置する。東西80m、南北150mの12,000m<sup>2</sup>の範囲に弥生時代中期、後期の土器片と、少量の土師器片が散布する地点である。弥生時代中期の土器片散布量は芝本遺跡B地点より少ない。

### **芝本遺跡 D地点 (S H D)**

芝本遺跡C地点と北部で接し、東西80m、南北200mの範囲に少量の弥生時代後期の土器片、土師器片が散布している。

平成5年に浜北市教育委員会が確認調査を行い、弥生時代後期の住居跡が確認されている。

遺物の散布量は芝本遺跡C地点よりかなり少ない。

### **芝本遺跡 E地点 (S H E)**

芝本遺跡D地点より南西80mに位置し、慈眼寺の南にひろがる。南西約40m、南北約20mのごく狭い範囲に少量の弥生時代後期の土器片、土師器片が散布している。あるいは芝本遺跡D地点に連続する地点かもしれない。

### **芝本遺跡 F地点 (S H F)**

芝本遺跡E地点より南、北部中学校の西に展開する。東西80m、南北200mの範囲に弥生時代後期の土器片、土師器片が散布する。

本地点は北部中西弥生遺跡と称せられ、昭和43年浜名高等学校史学部により発掘調査が行われた。発掘調査の結果は発掘面積が狭かったためか、若干の弥生式土器片、土師器が出土したにすぎず、同時代の遺構の発見はなかった(浜名高等学校1968)。

また、平成6年に北部中学校西側より中世墳墓が発見され、五輪塔と藏骨器が出土している。

### **芝本遺跡 G地点 (S H G)**

芝本遺跡F地点西側、中央に国道152号線が通過し、ほとんど宅地化されている。東西100m、南北400mの範囲に少量の弥生式土器片、土師器片が散布する。

本地点は芝本遺跡F地点、H地点のように段丘崖と接しておらず、やや低まった微高地で、遺物の散布量も少ないが、ボーリング調査により、弥生から古墳時代の遺物包含層と考えられている黒ボク土(黒色腐植土)が明瞭に観察されるため、同時代の遺構の存在が予想される。



第2図 遺跡位置図

### 芝本遺跡 H地点 (SHH)

遠州鉄道芝本駅の東に位置し、北は小さな谷をはさんで芝本遺跡F地点と接し、西は遠州鉄道をはさんで芝本遺跡G地点と接する。東西100m、南北350mの範囲に弥生時代後期を中心とする土器片、土師器片が散布している。現在はかなり宅地化が進み、遺物の散布も少なくなっている。

本地点は芝本第II遺跡、芝本弥生遺跡とも称され、昭和38年、39年、41~43年、49年の6次にわたって浜名高等学校史学部によって調査されている。これらの発掘調査で、弥生時代後期の壺棺をともなう方形周溝墓2基、隅丸方形プラン、円形プランの住居跡8軒、発掘区中央を南北に走る溝状造構1、特殊配列と称せられる土器片集中地点2地点、壺棺単独の埋葬施設3基の発見があった(浜北市教育委員会1985)。

### 東原遺跡 A地点 (HGA)

遠州鉄道芝本駅より南へ100m。芝本遺跡H地点と北で接している。東西180m、南北300mの範囲に弥生時代後期の土器片、土師器片が散布している。遺物散布量もかなり多く、芝本遺跡H地点とともに良好な地点であるが、近年宅地化が進んでいる。

昭和59年から62年まで浜名高等学校史学部が発掘調査を行った。弥生時代後期の住居跡が5軒検出されている。

### 東原遺跡 B地点 (HGB)

東原遺跡A地点と北で接し、段丘崖端より200mほど西の島状の微高地上に立地する地点で、東西150m、南北300mの範囲に弥生時代後期を中心とする土器片、土師器片、須恵器片が散布している。

本地点は昭和44年、浜名高等学校史学部により東原遺跡3次調査として発掘調査が開始され、平成4年度の21次調査まで継続して発掘調査が行われている。

また、昭和56、57年に浜北市教育委員会が発掘調査を行っている。

この発掘調査では50軒近くの弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡が検出された。これらの住居跡は比較的狭い範囲の発掘区の中ではほとんど切り合って検出され、かなり複雑な様相を呈している。住居跡のプランは隅丸方形をとるものが多く、張り出し部、貯蔵穴を有する住居跡も認められる。炉の形態も縁泥片岩等の縦長の石を1~2個配するものがある(浜北市教育委員会1983a・1983b 浜名高等学校1968)。

### 東原遺跡 C地点 (HGC)

東は東原遺跡B地点、西は段丘崖に接する地点である。この地点は周囲よりも-20cm~-50cmの凹地に立地しており、微高地とはいえない立地であるが、段丘崖近くは若干の高まりがあり、東西100m、南北250mの範囲に少量の弥生時代後期の土器片、土師器片、須恵器片が散布している。また、ボーリング調査でも黒ボク上(黒色腐植土)が確認されており、弥生時代後期から古墳時代の造構の存在が予想される。

### 東原遺跡 D地点 (HGD)

北で東原遺跡B地点、C地点と接し、芝本・東原遺跡群の南限にあたる地点である。東西150m、南北300mの範囲に土師器片、須恵器片が多量に散布する。

本地点は東原土師遺跡として浜名高等学校史学部により昭和40、43年の2回にわたる発掘調査が行

われ古墳時代後期の住居跡 2軒が検出された。また、平成 3 ~ 6 年に浜北市教育委員会で発掘調査を行い、古墳～奈良時代の建物跡群や溝が検出されている（浜北市教育委員会 1981・1991）。

昭和62年にも浜名高等学校史学部が津島神社東側を調査したが、なにも検出されなかった。

#### 東原遺跡 E 地点（HGE）

国道152号線の西に位置する。東西100m、南北400mの範囲に弥生時代後期の土器片土師器片が散布する。ここは芝本遺跡II地点と同様、段丘崖端に立地するものより 1m ~ 2m ほど低い。

本地点は国道152号線浜北バイパスがその南端を通過することから、昭和53、54年度にかけて浜北市教育委員会が発掘調査を実施したが、近世の溝状遺構等の検出があつただけで弥生～古墳時代の遺構、包含層とも検出されず、芝本・東原遺跡群の西南限をある程度知ることができた（浜北市教育委員会 1979）。

#### 東原遺跡 F 地点（HGF）

東原遺跡 E 地点より西へ100mほど離れて位置する地点である。

本地点は在住の野中勝氏の話によると、水神平式土器を出土した地点と伝えられるが、現在は少量の土師器片が散布するにすぎず、水神平期の遺物の散布は確認されなかった。また、当時出土した遺物は伝えられていないが、出土状況を考えると、壺棺の可能性が指摘できる。

昭和39年に浜名高等学校史学部により発掘調査が実施されたが、遺構、遺物の発見はなかった。

また、平成 5 年に浜北市教育委員会が確認調査を行ったが、明確な遺構、遺物の発見はなかった。

### III 従来の調査

#### 龜玉村郷土研究会の発掘（1954）

東原遺跡D地点の南を東西に流れる用水路の建設工事を行った際に、多量の土師器や須恵器が発見されたことに端を発し、故村松陸平氏を中心とする龜玉村郷土研究会が発掘を行った。公式な記録等が残っておらず、調査場所を含め、この発掘自体不明な点が多いが、土師器の甕等が、発見されている。

#### 浜名高等学校史学部の発掘調査（1965・1968）

現在も広場となっている東原遺跡D地点の中央部分を中心にトレンチによる発掘調査を行った。発掘調査の結果、3軒の竪穴式居跡・土坑2ヶ所が確認され、住居跡2軒と土坑が発掘調査された。第1号住居跡は、正方形に近い隅丸方形の平面プランで、長軸5.7m、短軸5.6m、壁高30.0cmを計測する。

第2号住居は、隅丸方形の平面プランで、長軸6.9m、短軸6.45m、壁高15.0～30.0cmを計測する。いずれの住居跡も、出土した遺物から古墳時代後期の範疇のものである。

第1号土坑は、第2号住居跡の北壁を切っており、長軸2.2m、短軸1.35m、深さ29.0cmを計測する。この土坑では焼土が検出され、鉄製品や环形土器が発見されている。

第2号土坑は、第2号住居跡の東壁を切っており、長軸1.35m、短軸1.20m、深さ17.8cmを計測する。出土遺物は発見されなかった（浜北市教育委員会1981）。

#### 浜名高等学校史学部の発掘調査（1987）

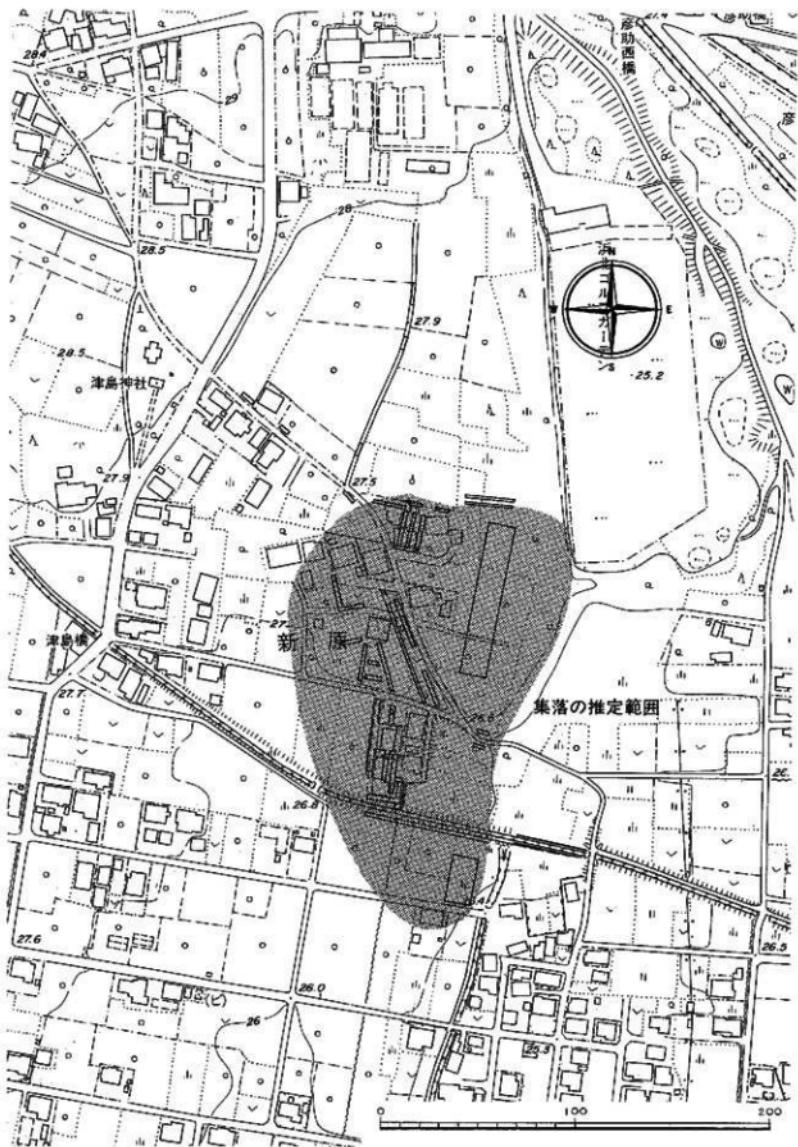
津島神社東側、東原遺跡D地点の西端部分の発掘調査を行った。表面上には土師器の散布がみられたが、遺構等は検出されなかった。

#### 浜北市教育委員会（1991）

中部電力送電線鉄塔建設に伴う発掘調査であり、東原遺跡D地点の南端を調査した。

溝状遺構が検出された。幅3.1～4.6m深さ20.0cmを計測する（浜北市教育委員会 1991）。

従来の発掘は以上であり、主として古墳時代後期を中心とするものであった。



第3図 東原遺跡D地点の調査（昭和40年～平成6年度分）

## IV 調査の成果

### 1. 遺構

今回の調査では、堅穴住居跡1軒、掘立柱建物跡2棟、土坑3ヶ所、ピットが検出された。遺構は、明黄褐色土層（地山）で遺構が検出でき、遺構はこの地山を掘り込んで、下の礫層まで達している。

遺構は、本来調査区全体に広がっていたと思われるが、調査区南側が、長い間植木畠として利用されていたため、地山が深くまで擾乱され、遺構は確認されず、今回は北側の雜木林であった場所から検出されている。

#### S B01（第7図）

S B01は、調査区の中央や北側部分に位置している（第5図）。大部分が調査区外のため、隅丸方形の住居跡の西側壁部分のみが検出された。

S B01の南北方向は3.65mを計測する。現況では礫層を掘り込んだ掘り方方面まで32.0cmを計測する。土層断面を観察すると掘り方より約10.0cm上に貼床面が確認でき、遺物の大半はこの床面より出土している。

また、土師器の瓶が出土していることから、窯をもちいた住居跡と想定できるが、窯部分は調査区外であるため確認できなかった。

出土遺物は、須恵器、土師器、鉄製品が発見されている。

#### S B01上層註

I. 黒色土層

II. 灰茶褐色土層

III. 茶褐色土層（黄灰色土混入）

IV. 茶褐色土層

V. 茶褐色土層（黄灰色土・礫混入）

VI. 茶褐色土層（黒色土混入）

VII. 黄灰色土層

#### S H01（第6図）

S H01は、調査区の北側に位置する（第5図）。また、S H02とほぼ棟方向にそろえていることから、同時期に存在した建物と考えられる。柱穴は、梁間×桁行が2×3柱間の掘立柱建物として検出された。規模は、芯々間で5.3m×桁行3.8m、面積は約20m<sup>2</sup>、主軸方位N-9°-Wである。

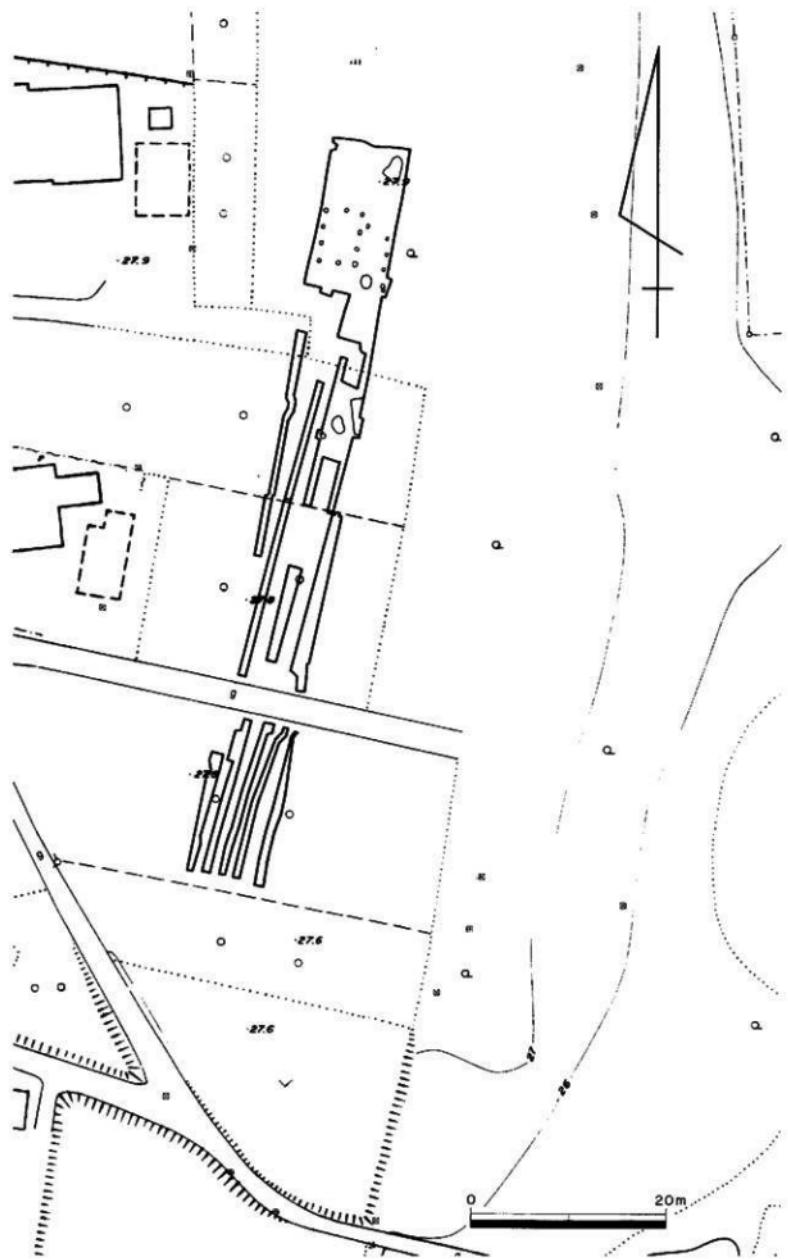
S H01の柱穴は直径約50cm位の円形で、掘り方も比較的明瞭であった。

北東側の柱穴の外側に添え柱状のピットが検出されている。

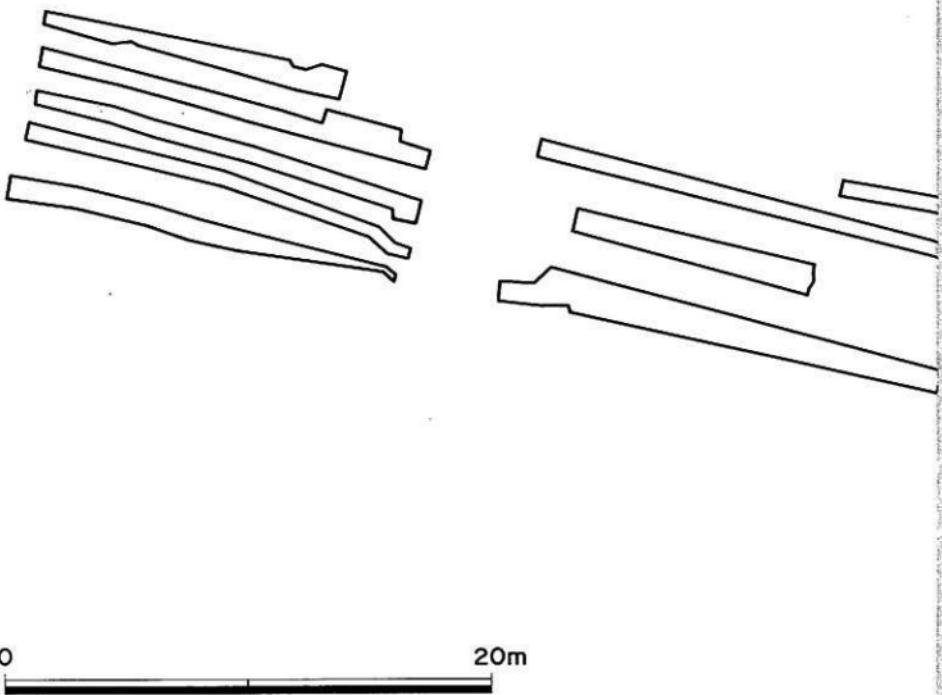
出土遺物は、発見されなかった。

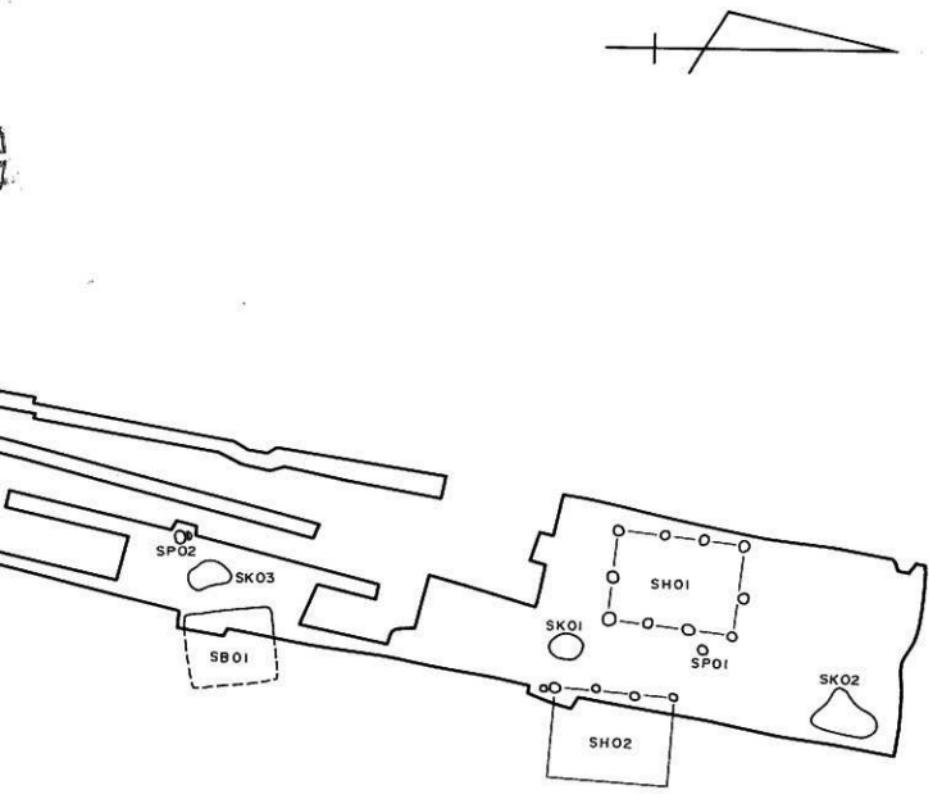
#### S H02（第7図）

S H02は、S H01の東側に位置する（第5図）。西側の柱列区外は調査区外となるため、検出されて



第4図 調査区域図





第5図 造構全体図

いない。桁行は、3柱間、芯々間で長さ5.0mの掘立柱建物と想定できる。

主軸方向は、N-3°-Wである。

S H02の柱穴は、直径約40cm位の円形で、掘り方も比較的明瞭であった。南側に添え柱状のピットが検出された。

出土遺物は発見されなかった。

#### S K01 (第7図)

S K01は、S H01とS H02に挟まれた位置にある（第5図）。

長軸1.5m、短軸1.15m、深さ43.0cmを計測する内湾気味の土坑である。

土坑の埋土は、有機質に富む黒色土がほとんどである。

出土遺物は、土師器片が発見されているが、時期が判明できるものではない。

#### S K01土層註

- I. 黒色土層
- II. 黒色土層（小礫混入）
- III. 黒色土層（粘性あり）
- IV. 黒色土層（粘性なし）
- V. 黒色土層（黄褐色土混入）
- VI. 暗黒褐色土層
- VII. 黒色土層（粘性あり・固い）
- VIII. 黒色土層（黄褐色土ブロック混入）
- IX. 灰褐色土層
- X. 黄褐色土層（粘性弱く柔らかい）

#### S K02 (第7図)

S K02は、S H01の北東側に位置する（第5図）。

長軸2.54m、短軸1.75m、深さ78.0cmを計測する土坑である。

S K02は、2つの土坑が複合しており、長軸方向の大きな土坑が最初に掘られ、この土坑が埋ってから、再び短軸方向の小さな上坑が掘られたと土層断面の観察から考えられる。

出土遺物は発見されなかった。

#### S K02土層註

- I. 黒色土層
- II. 暗黒褐色土層
- III. 黄灰色土層
- IV. 暗黒褐色土層（黄灰色土混入）
- V. 暗黒褐色土層（黒色土混入）
- VI. 黄灰色土層（黒褐色土混入）
- VII. 明黄灰色土層

### S K03 (第7図)

S K03は、S B01の西側に位置する（第5図）。  
長軸1.8m、短軸1.0m、深さ65.0cmを計測する土坑である。  
S K03は、地山を掘り込み、礫層まで掘り込まれている。  
出土遺物は発見されなかった。

### S K01土層註

- I . 暗茶褐色土層
- II . 暗茶褐色土層（Iより暗い）
- III . 暗茶褐色土層（黄灰色土混入）
- IV . 茶褐色土層（黄灰色土混入）
- V . 茶褐色土層
- VI . 黄灰色土層（茶褐色土混入）
- VII . 黄灰色土層（円碟が多量混入）
- VIII 明黄灰色土層

### S P01・02 (第7図)

S P01・02はS K03の西側に位置する（第5図）。  
S P01は、直径40.0cm、深さ28.0cmを計測する。底部に直径20.0cm、深さ4.0cmの浅いくぼみがある。  
S P02は、S P01に重複しており、直径40.0cm、深さ15.0cmを計測する。  
出土遺物は発見されなかった。

## 2. 遺物

出土した遺物は、主に土師器を中心に須恵器、鉄製品がある。その大半は、S B01から出土している。ここでは図示可能な遺物7点を掲載した（第7図1～7）。

1は、S B01の床直上から出土した鉄製のU字形鍬鋏先である。長さ8.8cm、幅9.0cmを計測する小型の鍬鋏先である。はめ込み部分は、のみ状工具でさいて受部分をつくり出している。

2は、土師器の小型の壺である。口径は推定9.0cmあり、底部を欠いている。色調は乳黄灰色、焼成はやや良好である。

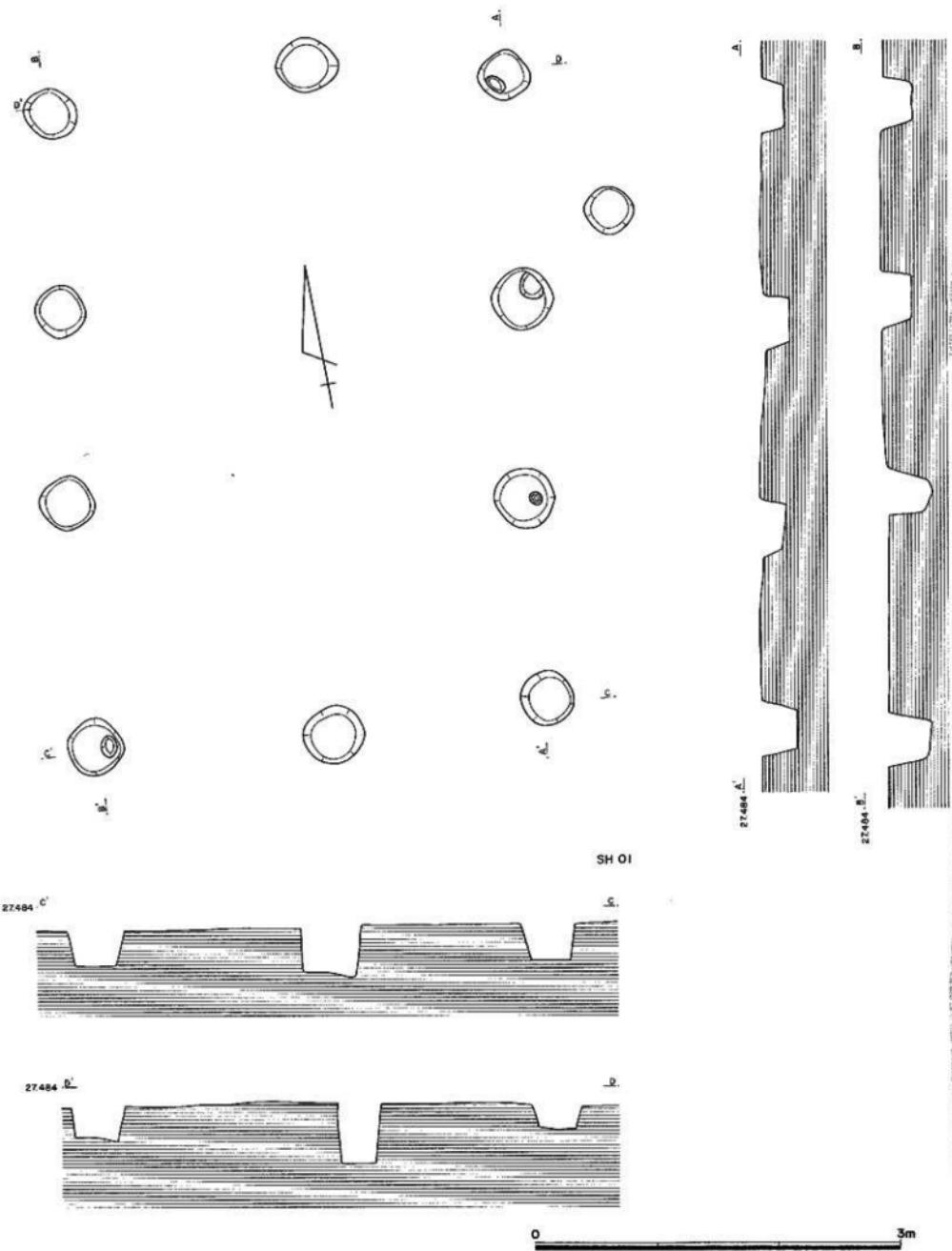
3・4は、土師器の瓶のとっ手の部分である。その形状の違いから、3・4は別個体のものと思われる。

5は、土師器の壺である。口径は推定15.0cmあり、底部を欠いている。色調は、乳黄灰色、焼成は良好である。器面は丹彩が施されている。

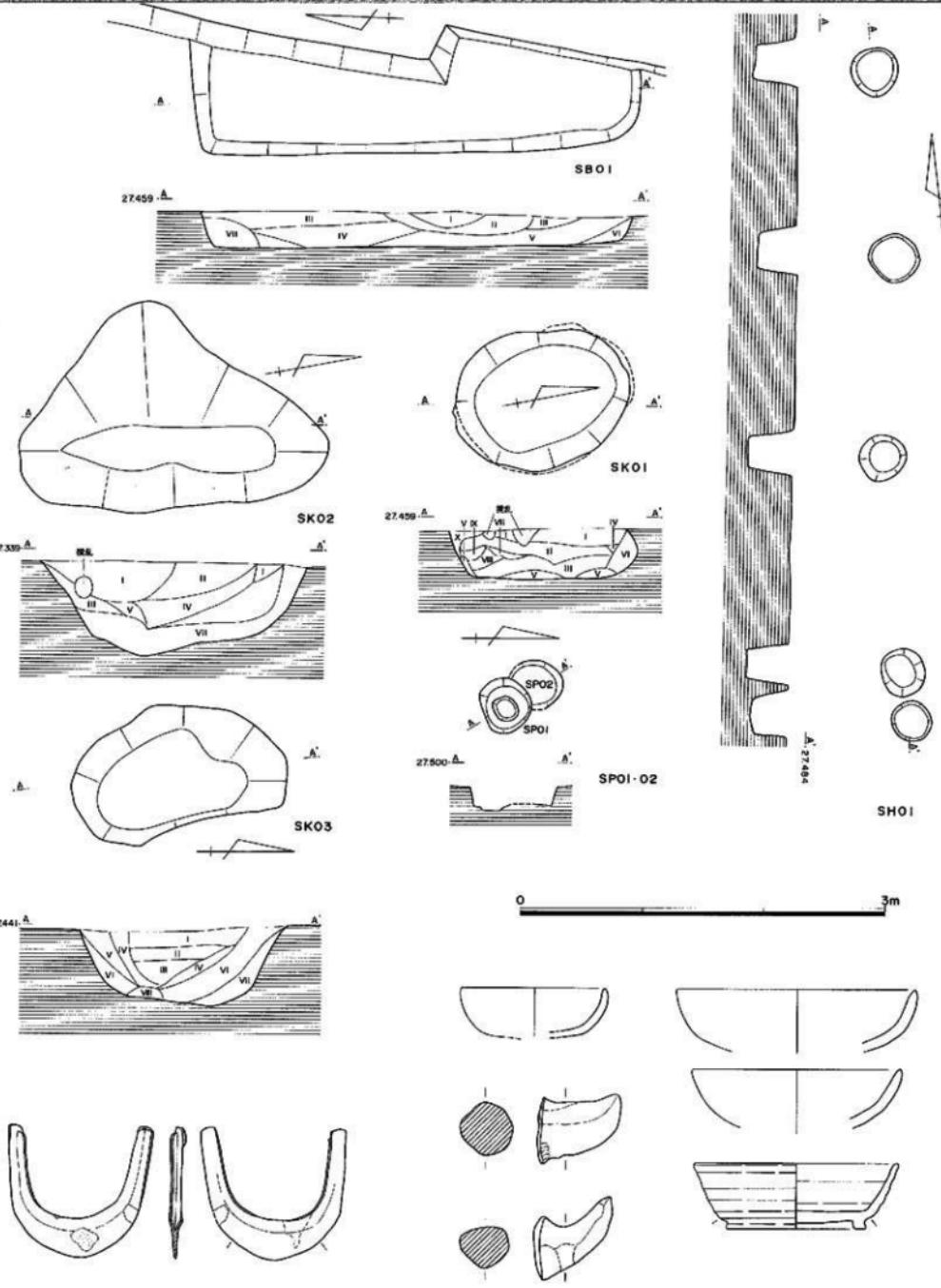
6は、土師器の壺である。口径は推定13.0cmあり、底部を欠いている。色調は乳黄灰色、焼成は良好である。器面は丹彩が推定されている。

7は、須恵器の壺である。口径は推定12.8cm、高台部径8.8cm、高さ4.1cmである。色調は灰色、焼成は良好である。

他にも、土師器の長胴甕が出土しているが、細片のため図示できなかった。



第6図 遺構実測図



第7図 造構・遺物実測図

## V まとめ

今回の調査は、幅7.5mの道路幅の発掘調査で、集落遺跡としての東原遺跡D地点を考えるには狭い面積の調査であった。その狭い発掘調査であったが、検出した遺構には東原遺跡を考えるうえで重要な発見もあった。

そこで、検出された遺構・遺物について検討してみたい。

S B01は竪穴住居跡であるが、その遺構の大部分は調査区外のため、完掘できなかったが、一辺の長さが3.65mと以前の浜名高等学校史学部の発掘調査（浜北市教育委員会 1981）で検出された住居跡に比較して小規模な住居跡である。

出土した遺物をみると、須恵器の壺（第7図7）が、遠江須恵器編年のⅧ期（8世紀前半）に該当すると考えることができる。浜名高等学校史学部で発掘調査した住居跡は出土遺物から遠江須恵器編年Ⅸ期後葉（6世紀末～7世紀初頭）の時期に該当しており、東原遺跡D地点は古墳時代後期から奈良時代初頭に営まれた集落であったと考えられる。

発掘区の北側から検出された掘立柱建物（S H01・S H02）の時期等を考えるには、出土遺物が伴なわないので、明確な時期はわからないが、同遺構の周辺や、遺構上の包含層から古墳時代後期から奈良時代の土師器しか発見されないことから、古墳時代後期から奈良時代の範囲の遺構と考えられる。また、S K01は黒ボク土とは違う非常に有機質の高い黒色土が遺構を埋めており、他の土坑とは性格が違う。

今回の調査区の東側20m先には、天竜川によって削られた浜北段丘崖があり、S B01やS H02のように調査区の東へ遺構が延びていることから、段丘崖のかなり近くまで、集落があったことが考えられ、1968年の発掘調査で集落の西端、1991の調査で集落の南端、今回の調査及び確認調査で集落の北端、東端が確認でき、集落の範囲を南北200m、東西100mの浜北段丘上の島状の微高地に立地する集落と想定できる。

最後に、天竜川が集落のすぐ東側を流れ、洪水等の水と闘いながら生活を営んでいた古代施玉の村の人々は、いったいどこに墳墓を造っていたのであろうか。現在、調査を行っている高根山古墳群がちょうど集落が営まれていた時期と重なる古墳群である。東原遺跡に立つと、高根山が東原の集落の北側へ遠望できる。逆に高根山に立つと眼下に東原遺跡を望むことができ、このあたりが東原に暮らした人々の奥津城であったのではなかろうかと思いつめぐるものである。

## 付載 浜北市東原遺跡出土鍔先の保存処理報告

鈴木 敏則

浜北市東原遺跡から出土したU字形の鍔（鏃）先は、泥土を取り込んで錆びており、跡鉄と見間違うほどであった。保存処理は錆ぬなどをできるだけ除去し、遺物本来の形状を分かるようにし、合成樹脂で脆弱化した金属を強化させ、再び錆ないように表面に被膜を作ることを目的とする。錆は長年にわたる金属と水や酸素の科学変化により形成されたものである。錆は科学的には安定したものであり、金属の表面に緻密な錆層が形成されれば、それ以上には錆は深化しない。しかし、出土した鉄製品には泥土を含む、多孔性の錆が形成されているため、さらに錆は進行する。そのため錆をよく除去し、合成樹脂で補強し、保護膜を作らなければならないのである。

今回用いた合成樹脂は防錆アクリルエマルジョンMV1であり、金属製品内部まで樹脂を浸透させるために、真空含浸することにした。装置は、模式図に示しておいたので参照されたい。作業の工程は以下の通りである。

作業工程 (1994年7月～9月)

- 1 錆瘤・泥土等を除去・接合
- 2 エチルアルコール等で洗浄
- 3 赤外線乾燥機で乾燥 (105°Cで約5時間)
- 4 減圧槽で減圧 (20mm/Hg 1時間)
- 5 防錆アクリルエマルジョンMV1を注入
- 6 約12時間後に樹脂液中から取り出して表面を紙で拭く
- 7 自然乾燥
- 8 復元
- 9 実測
- 10 写真撮影

なお接合にはセメダインCを、復元にはフェノール系マイクロパルーンをセメダインCで練り合わせたものを用いた。また錆取りの後、本体が脆弱化した部分にはパラロイドB72(キシレン溶液約10%)を塗布し、強化した。

東原遺跡出土の鍔先は、最大幅9.0cm、長さ8.8cmと小型の部類に属する。刃部は先端部だけにつけられ、外側の部分では面をもっている。風呂部を受ける溝には木質は残存していない。また、使用された痕跡は稀薄である。現状の重さは24gである。

鍔取りの段階で、気付いた点を述べておきたい。U字形鍔先の製作技法においては2案が提出されている。

A 長い鉄板を二つにたたみ、両方の端をひねり上げて作ったとする白木原説。

(白木原和美1966「クワとスキについての研究ノート」『歴史評論』118)

B 長方形の鉄板の上端をたがねで溝を掘り、その後U字形に成形するとする松本説。

(松本正信1969「U字形鍔（鏃）先論」『考古学研究』第15巻第4号)

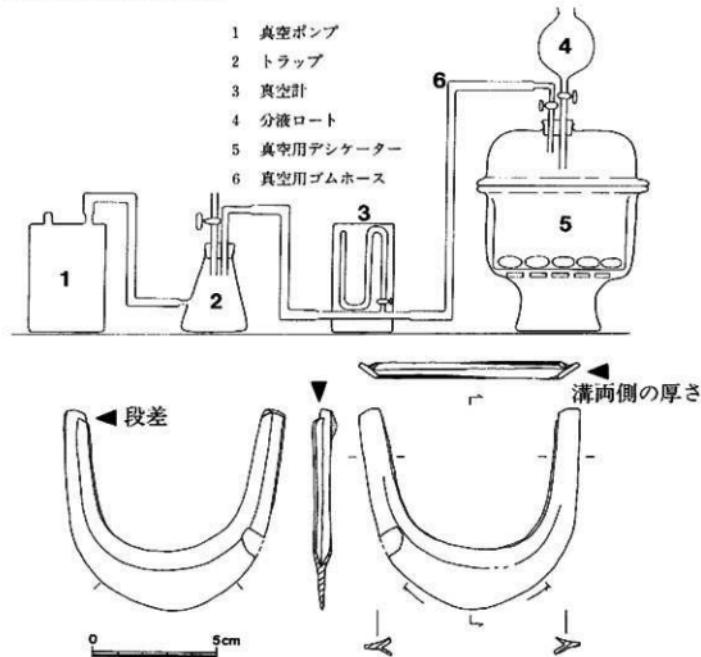
東原遺跡の鍔先については、風呂部を受ける溝の両端の厚さはそれぞれの部分で均一ではないが、両端の厚さを合わせるとどの部分でもほぼ同じ厚さになる。つまり本来一枚の鉄板をたがねで裂いた

状態と思われる。また片方の耳部先端は段差をなし、鉄板をたたんだ状況ではない。

以上2点の観察から、製作技法B案によって作られた可能性が高いと考えられる。

保存処理の目的は、もちろん鉄製品の防錆にあるがそれだけではない。鉄に泥土が付着していっては本来の形が分からなければばかりか、錆はさらに進行し、製品の崩壊をまねく。そのため泥土や錆瘤を除去してやらなければならない。しっかり錆等を取り保存処理を行えば、今まで観察できなかった細かな作りや構造が判明する場合が多い。上記のように風呂部を受ける溝を“たがね”で切り込んだのではないかとしたのも防錆処理作業を行って初めて分かるもので、そこに最大の効果があると思われる。最後になってしまったが、発表する機会を与えてくださった浜北市教育委員会の久野正博氏にお礼申し上げたい。

### 真空含滲操置模式図



## 写真図版1



東原遺跡D地点航空写真

写真図版2



a. SB01及びSK03



b. SK01

### 写真図版3

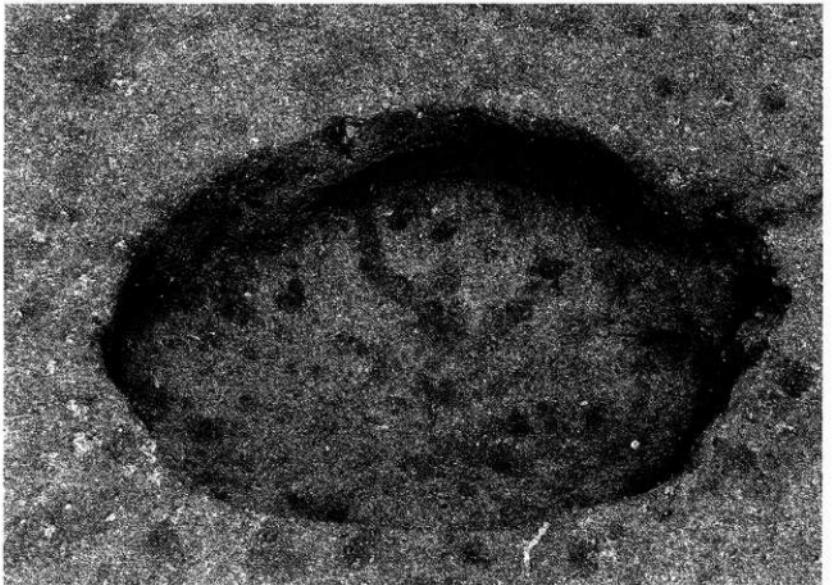


a. SHO1及びSHO2

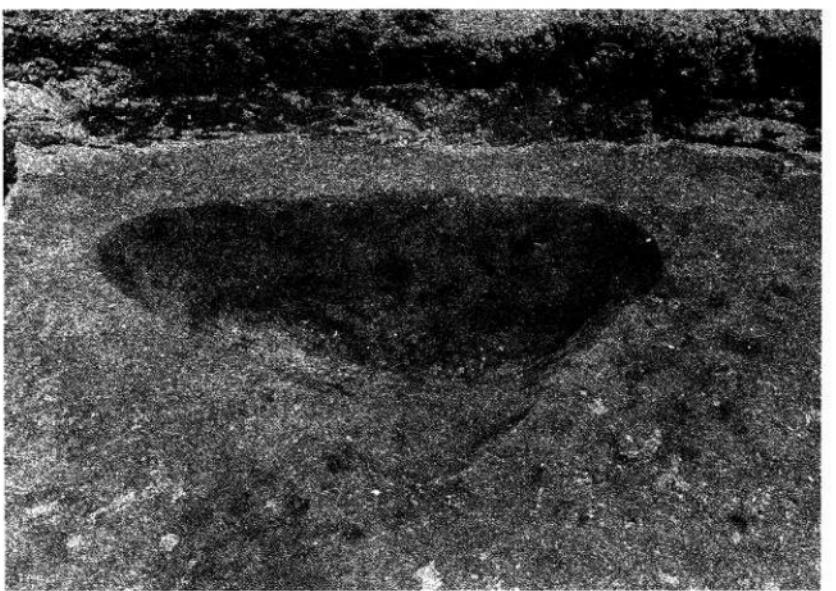


b. SHO1

写真図版4

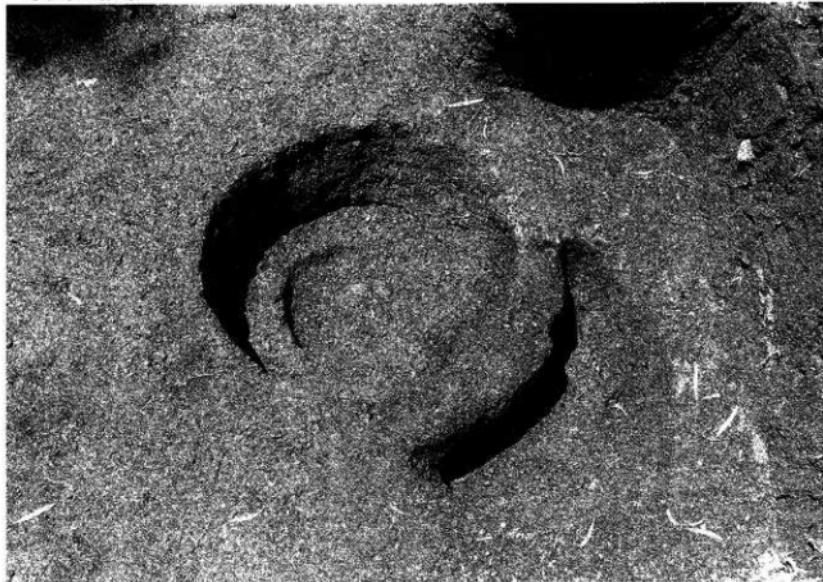


a. SK01

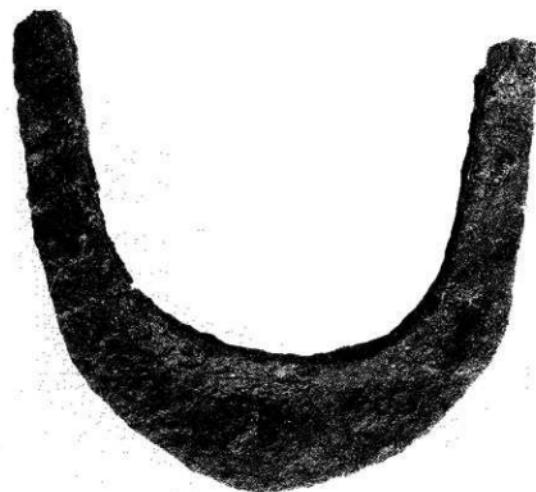


b. SK02

写真図版5



a. SPO 1 及び SPO 2



b. SB0 1 出土鉄製鍤鋤先

# 報告書抄録

ふりがな	ひがしばらいせき でいちてん						
書名	東原遺跡D地点						
副書名	県営畠地帯総合土地改良事業東原地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	久野正博・鈴木敏則						
編集機関	浜北市教育委員会(生涯学習課)						
所在地	〒434 静岡県浜北市貨布町291-1 TEL053-586-6200						
発行年月日	西暦 1994年 11月 30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ひがしばら 東原	しづおかん 静岡県	22218 41	34度 48分 49秒	137度 48分 11秒	1994 05 11 1994 06 30	500m <sup>2</sup>	土地改良
いせき 遺跡	はまきたし 浜北市 しんばら 新原						
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
東原遺跡	集落跡	占墳時代 後期 ～ 奈良時代 前期	壠立柱建物 2棟 竪穴住居跡 1棟 土坑 3基 その他	土師器・須恵器 鉄製鍬鋤先			

## 参考文献

- ・浜北市教育委員会 1979 「浜北市東原遺跡II」
- ・浜北市教育委員会 1981 「浜北市東原遺跡D地点」
- ・浜北市教育委員会 1983a 「浜北市東原遺跡(4)」
- ・浜北市教育委員会 1983b 「浜北市芝本遺跡B地点」
- ・浜北市教育委員会 1988 「浜北市北麓古墳群」
- ・浜北市教育委員会 1991 「東原遺跡D地点」
- ・浜名高等学校史学部 1968 「伎倉」第2号

## 東原遺跡D地点

—県営畑地帯総合土地改良事業東原地区  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成6年11月30日

編集 静岡県浜北市貴布祢291-1  
浜北市教育委員会生涯学習課

発行 静岡県西部農林事務所  
静岡県浜北市教育委員会

印刷 杉森印刷株式会社